白河浪漫新聞

まちづくり目指す「楽市」

福島県白河市のまちづくり会社「楽市白河」（鈴木雅文社長）はJR白河駅を中心とした市街地活性化に取り組んでいる。東日本大震災や東京電力福島第一原発事故などの災害を乗り越え、大正時代に建てられた駅舎を活用した「えきかふぇ　shirakawa」を開店したり、大正文化がかおるモダンな建築物を活用した商業店舗集合施設「楽蔵（らくら）」を整備するなど独自の事業を展開している。今後は集合住宅や駐車場を整備する計画だ。地域のシンボル「小峰城」「白河だるま」などの史跡や文化を大切にしながら、多くの人を呼び込む新しいまちづくりを模索する。

（緑川ほのか、兼子叶花、秋迦成）

「大正」感じる駅カフェ

大正時代の駅舎の風情を残すJR白河駅

同社は2000（平成12）年7月、鈴木社長ら有志5人が立ち上げた。隣接する西郷村に東北新幹線が停車するJR新白河駅や日本中央競馬会（JRA）の場外勝馬投票券発売所（ウインズ新白河）が整備されたことなどで、人の流れが変わり市街地が空洞化している現状を危惧、まちづくりに乗りだした。

同社は平成24年4月、市民の交流施設「マイタウン白河」の指定管理者となった。これまでに市内循環バスの運行、高齢者への弁当宅配事業「街なかあったかサービス」など、地域に根差した活動をしている。取り組みが評価され、26年6月に国土交通省大臣表彰、29年11月に地方自治法施行70周年総務大臣表彰などを受けた。

モダンな雰囲気のえきかふぇ店内

えきかふぇルポ

外はサクサク、中ふわふわ 甘さただよう パンケーキ

えきかふぇの店内は大正時代の建築様式のモダンな空間が広がる。成田エクスプレスの電車の中をイメージした座席もあり、旅行気分でお茶を楽しめる。

パンケーキなど、若い世代に人気のスイーツにも注目。外はサクサク、中はふわふわのパン生地を2段に重ね、ホイップクリームとバニラアイスを載せた「ふわふわパンケーキ」（680円税込み）は店一番の人気のメニュー。タピオカドリンク（450円税込み）はミルクティー、チャイティー、カルピス、抹茶ミルク、オレンジ、ザクロの6種類から選べる。店の一押しはチャイティー。子どもから大人まで、飲食を楽しみながら、ゆっくりとくつろげる。

（髙野愛香、戸倉惇之助）

店一番の人気メニュー「ふわふわパンケーキ」

和のテイストが美しい「楽蔵」

大震災に負けず熱意でオープン 楽蔵（らくら）

楽蔵は2011（平成23）年4月に開店する予定だったが、東日本大震災に見舞われ延期を余儀なくされた。壊れた壁などを修理するのに資材が調達できずに苦労したが、関係者の熱意で同年6月にオープンにこぎつけた。現在、沖縄料理店などの飲食店と、何人かの経営者が事務所を共有して経費を安くする「シェアオフィス」など8店舗が入居している。

外観は純和風で、中には大正時代の建築様式の建物があり市重要文化財に指定されている。

（菅野莉稟）

もっと仲間増やしたい

楽市白河の取締役を務める古川直文さん（55）は白河浪漫新聞のインタビューに応え、今後の課題や夢を語った。

楽市白河取締役――古川直文さんに聞く

―社名に込めた思い、やりがいは

戦国時代の武将・織田信長が行った楽市・楽座のように白河の商売を盛んにするという思いを社名に込めた。地域の人々に白河が住みやすくなった、街なかに活気が戻ったという声を聞くとうれしくなる。民間だけ、行政だけではできないことをうまくつないでまちづくりをしたい。古里が元気になるのはうれしい

―今後の課題は

従業員は現在17人。事業を拡大したいが、一緒に会社を手伝ってくれる人が少ないので、もっと仲間を増やしたい。今後は街なかに集合住宅や駐車場を整備するなど、ハード面の事業を強化する。来年設立20周年なので記念事業をやりたい

―夢は

「白河だるま」「南湖公園」「白河ラーメン」など全国に誇れる地域の伝統や文化、歴史を守りながらみんなが明るく集える白河にしたい。特に市のシンボルである小峰城を生かし誘客を図りたい

私たちが作りました

髙野愛香（会津ザベリオ学園高2年）
戸倉惇之助（埼玉・栄東中1年）
緑川ほのか（白河第二中1年）
兼子叶花（白河第二小6年）
秋迦成（泉崎第一小6年）
菅野莉稟（桜小6年）